

中学生・高校生の衣生活について —制服に対する意識および服装への興味関心—

村田温子・渡辺澄子*

* 松阪大学短期大学部

Clothing life of high school and junior high school students
The ideas about school uniforms and levels of interests in clothes

Atsuko MURATA・Sumiko WATANABE

I. はじめに

急激な社会状況の変化の中で、子どもたちを取り巻く環境も変容し、多くの問題が出てきている。学校教育においても種々の問題があるが、学校制服もその一つと考え、中学生・高校生の制服に対する意識と普段の服装に対する興味や関心、さらに生活態度や規範と制服に対する考えとはどのような関連があるのかを検討した。この調査は、三重県共同企画の一環で「三重県における中学・高校生のライフスタイルに関する調査研究」を実施し、すでに報告した調査項目の中から衣生活に関する部分について、さらに検討したものである。

II. 方法

調査時期 2001年11月～2002年1月

調査対象 図1に示すように、三重県の北勢から南勢、尾鷲、熊野地区まで全域の中学28校、高校27校をランダムサンプリング（人口密度にほぼ比例した割合で、大規模校、中規模校、小規模校に渡る）

調査方法 クラス単位の自記式集合調査

調査人数 中学生1,180名、高校生1,395名、計2,575名

調査内容

制服に対する良否とその理由
服装のセンスの良し悪し
ブランド服の好き嫌い
服の好み（地味・派手）

服装に対する興味・関心

スカートの好き嫌い（女子のみ）

人間関係

生活習慣（規範、態度）

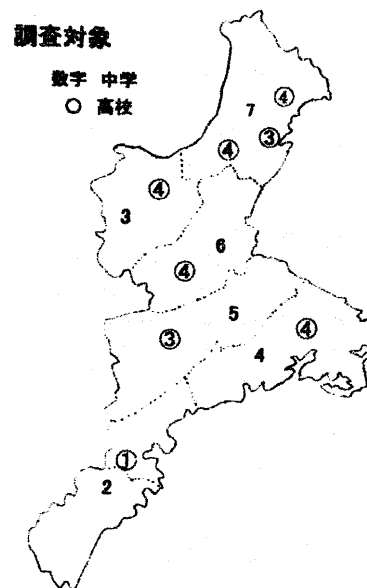


図1 調査対象

III. 結果

調査校中、高校1校、中学1校のみ自由服であったが、三重県下のほとんどの学校で標準服と呼ばれる制服を指定していた。そこで制服のある学校の結果について取りあげる。

制服のある学校においては、図2に示すように、「制服をよいと思う」と回答したものが、

多少の学年差はあるものの、中学、高校、男女ともに 6 ～ 7 割あった。中学は男女とも 2 年の制服支持者が一番低率で、3 年が高率であった。高校男子については、2 年生が一番支持者が多くなったが、女子は一番少なくなった。中学 1 年は、制服にあこがれて入学したが、2 年になると少し反発してみたくなり、減少したが、やっぱり制服は楽でよいということなのか 3 年になるとまた上昇したものと考えられる。(このことについては後述の制服に対する良否の理由とも合致する)

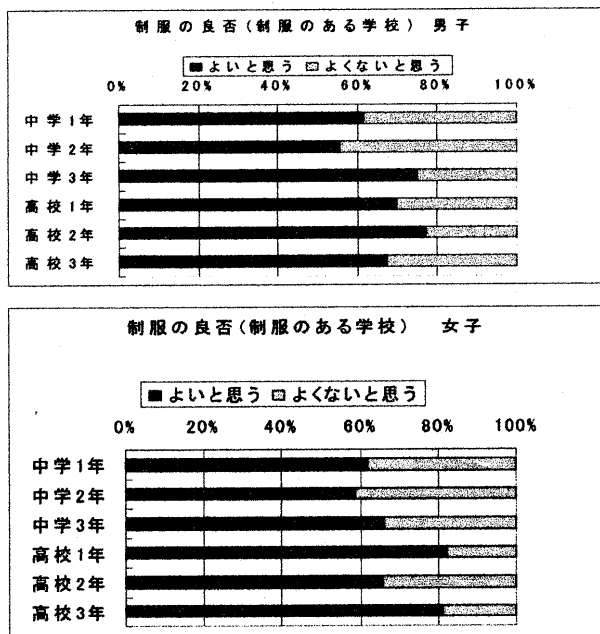


図2 制服があることについて

制服があることを「よいと思う」か「よくないと思う」かの良否理由を自由記述で回答を求め、内容のよく似たものをまとめた。男女、学年によって内容に多少の差があったが、最終的に 15 ～ 16 項目に分類できた(図 3)。なお、この集計は、制服支持者(制服をよいと思う)で、その理由が記述されていた人数を母数として処理した。各図中の帯グラフは、中高、男女それぞれ全体集計したものを理由の多い順に並べて示した。また、棒グラフは、全体集計の順序に従って並べた。

「制服をよいと思う」制服支持者は、図 3 に

見るように中学、高校、男女では若干の差が見られる。全体では、いずれも「楽・悩まなくて良い」が一番高率であり、中でも高校女子は、50.5 %と最も高率であった。「何となく」は、男子の方が女子より高率であった。

それぞれ個別に見ると、「楽・悩まなくて良い」は、どの学年も男女ともかなり高い率を占めている。高校 2 年女子では 57.8 %で最も高率であった。しかし、中学一年男女は、「楽・悩まなくて良い」は、ともに他の学年に比べて低い率になった。中学男子においては、3 年が突出して高率であったが、1 年は、「何となく」より低率となった。「楽・悩まなくて良い」は、消極的な理由であるが、ファッションに興味はあるものの、「皆が同じ・平等」などの理由とともに他と比べなくてもよい、何も考えずに朝起きたらすぐに着られるという便利さがその理由になったように思われる。

「格好良い」については、中学、高校ともに低学年ほど高率である。前述の「学生らしい」「楽・悩まなくて良い」などとの理由とも考え合わせると、中学 1 年は、小学生の時は制服がなく、中学生になって制服が着られるという制服に対するあこがれや、学生らしさなど、少し成長したことの実感なのか、制服を「楽・悩まなくて良い」という理由より、制服に対するあこがれ、学生らしさを優先させたものと考えられる。しかし、ファッション志向とは反対に、「楽・悩まなくて良い」という理由は、男女ともに学年が上がるにつれて高率になった。

「何となく」という理由は、中学では男子、女子ともに高学年になるほど減少する。中でも 3 年女子は、かなり低率であった。しかし高校においては、男子の 1 年、3 年ではかなり高率である。高校女子では、中学女子よりは減少傾向で、女子では年齢とともにおしゃれに関心が高くなり、制服を衣服の対象の 1 つととらえるものも多くなるのではないと思われる。

「学生らしい」は中学 1 年では 17.6 %で、学年、男女を問わず一番高率であったが、高校 2 年男子を除けば学年が上がるにつれ減少している。中学 1 年は学生服を着ることによって、

「小学生とは違うよ」「ちょっと大きくなったんだよ」ということで学生らしさを理由にしたものが高率になったように思われる。学年が上がるにつれ減少したのは、ファッションに対する上昇志向が出てきたものと思われる。

「経済的」は、学年が上がるほど率が高い傾向で、女子の方がより大きかった。女子は、制服があると私服をいろいろ買わなくてもよいから経済的であると考えているものが多いということのように思われる。

「温度調節」は、中学男子が他より高率であったが、これは学生服の下にセーターなどを着込むことができ暖かいという理由が多く、調査時期が冬季であったことも一因しているように思われる。中学女子、高校男女ではこの項目は長所より短所としているものが多かった。

他に目立った理由としては、高校3年女子に低率ではあったが、「今しか着られない」というものがあつた。卒業を間近に控えた感傷からか、このような結果になったと思われる。

全体的に見てみると「楽・悩まなくて良い」「何となく」という消極的な理由が大半を占め、積極的に制服を支持する考えはみられないのが現状であった。

制服についてよくないと思う理由については(図4)、全体では、中学男子を除けば「格好悪い」が最も高率で、次に目立つのが高校男子の「個性がない」である。個々には、中学1年男子では、1位が「動きにくい」とするもので40.0%もあり、圧倒的に多い理由であった。これが2年になると、この「動きにくい」は、11.1%と約1/4に減少した。他の学年では男女ともに、この項目は低率であった。今まで私服で自由に着やすい服装をしていたものが、中学生になって制服になり、伸びない布帛製品で、動きにくさを感じているのだと思われる。さらに三重県の男子制服は、詰め襟のものが多く1年生は制服の規則を守り、カラーを付け、ボタンをきちんと上まで閉じた状態で着用しているものが多いようで、このことが結果に現れたのではないかとと思われる。

中学男子では比較的少なかった「格好悪い」が中学女子、高校男女では圧倒的に多い理由になった。この傾向は年代が上がるにつれて高くなる。高校3年女子に至っては、84.8%のものが「格好悪い」としている。

「個性がない」は、高校男子に37%あるものの他の学年は、中学1年男子10%、中学1年女子13%、中学3年女子10%がやや目立つが、「格好悪い」が最も多かった高校3年女子は、3%と非常に低率である。良いと思う理由の「楽・悩まなくて良い」が多かったことと合わせ、「格好悪い」としながらもどのように個性を出すかについてはまだ確立されないで、悩んでいるのではないかとと思われる。

「お金がかかる」は、制服の方がよいとしていたものより高率になり、私服の方がお金がかかると考えているものが多いと考えられる。反対に制服は一度に揃える必要があり、制服の方が費用がかかるというものもあつた。

どの学年でも「温度調節ができない」としているものが、制服支持派より多かったのは、調査時期にも関係あつたのか、制服そのものよりもコートの着用に制約がある為か寒いとした理由が多かった。女子の方にこの理由が多いのは、女子はスカート着用が標準服で、普段ジーパンで過ごすことの多いものにとっては、スカートは寒いと感じるのではないかとと思われる。また夏には、Tシャツで過ごすことの多いものにとっては、制服のシャツは暑さを感じているようである。

「強制いや」は、高校3年男子、高校2年女子が高率であった。ファッション志向が高くなってきた上、学校生活にも慣れて規定に縛られるのはいやと言う表れのように思われる。しかし、「堅苦しい」は、中学男女に見られる理由で、中学生の方が規制、規則を堅苦しいと感じているように思われる。高校生は、規制、規則はあるものの詰め襟のカラーをはずし、ボタンもはずすなど着崩して着用しているのも大目に見られているのか、堅苦しさをを感じるものが少なくなったようである。

「面倒」という理由も中学男子には多い。体

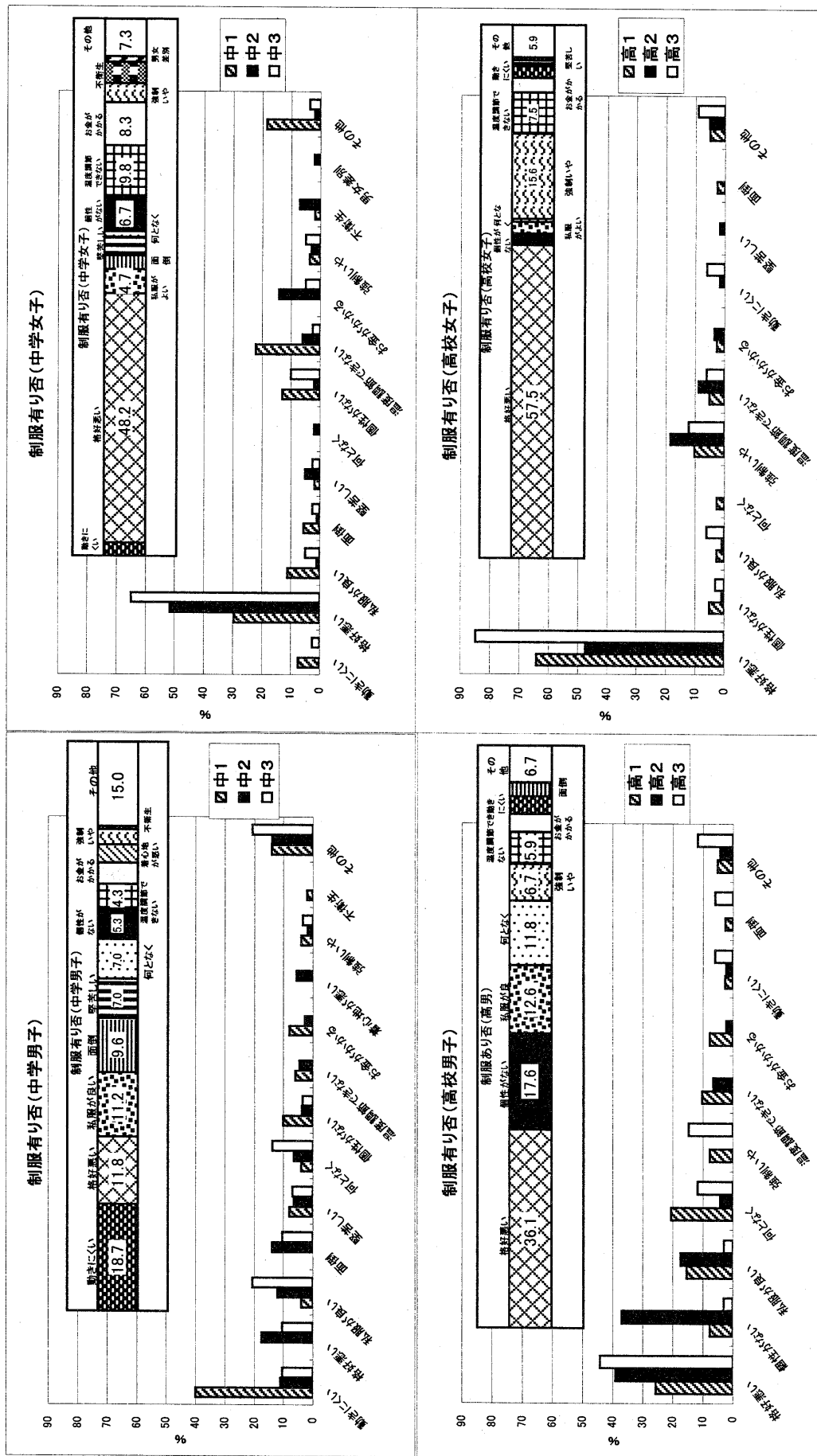


図4 制服を否とする理由

育のときに着替えるのが面倒だと感じているものが多いようである。

他には「不衛生」というものが、中学で多少出てきたが、小学生の時は毎日着替えていたものが、同じ制服を毎日着ることを不衛生と感じているようであるが、学年が上がると毎日着る制服に慣れたからか、不衛生を理由に挙げるものが少なくなった。

単に「私服がよい」という消極的な理由も中学3年男子では、20.7%もあった。

「面倒」と考えるものが、中学2年男子で13.9%、中学3年男子で10.3%あるのは、規則に従ってきちんと着用するのを面倒と感じているようである。

服装への興味・関心について5段階評定で回答を求めた結果を図5に示した。「服装に対する興味や関心があるかどうか」については、他の項目よりは「興味や関心がある」率が高く、男子は学年が上がるにつれ、「興味や関心がある」とするものが増加、反対に「興味や関心がない」とするものが減少傾向である。女子については、「ややある」まで含めると、どの学年も80%程度が興味はあるとしている。

「服装のセンスがあるかどうか」の項目については、男子は高校1年が一番低率であるが、他はほとんど同率であった。女子は学年とともに高率になる傾向で、男女ともに「どちらでもない」の回答が目立つ。

「ブランドの好き嫌い」については、女子の方が「好き」としている率が高くなった。男子は、少しではあるが、年代とともに率が増加している。

「派手な服を好むかどうか」については、男子は「地味な服を好む」方が「派手な服を好む」より高率であった。女子は学年とともに、「派手な服を好む」は減少、「地味な服を好む」が増加している。

全体的に見て、女子の方がファッションには興味や関心があるようであるが、「センスがある」というものはそれほど多くはない。学年が上がるとともに、服装に対する興味・関心が表

れてきているのに、センスについては自信がなくなるのか、自分を自覚するからなのか段々減少している。

「スカートを好むのかズボンを好むのか」について（女子のみ）は、スカート、ズボン「どちらでもない」がほぼ1/3ずつで、「スカートが好き」は、学年とともに少しずつ減少している。パンツ、ジーパンなど日常でも好まれる流行の反映でもあると思われる。

「服装に対する興味や関心があるかないか」の項目および「服装のセンスがあるかないか」の項目と「制服の良否」とのクロス集計をした結果を図6に示した。

「非常にある」と「ややある」を「服装に興味や関心がある」「服装のセンスがある」とし、「ややない」と「非常にない」を「服装に興味や関心がない」「服装のセンスがない」として集計した。ここでは、学年別では母数が少なくなったので、中高、男女別に集計した。

「服装に対する興味や関心のあるなし」や「服装のセンスのあるなし」に関わらず、制服の良否については、中学、高校ともに同じような傾向を示し、半数以上が制服はよいと思うと肯定している。男女では、中学、高校とも女性の方がその率は高くなった。制服は「楽・悩まなくて良い」が多かった理由とも合致する。

服装に対する興味・関心についての相関を見たところ、各項目間の相関では、「ブランドの服が好きー嫌い」と「派手な服が好きー地味な服が好き」「服装のセンスはよいーセンス悪い」と「服装に対する興味や関心があるーない」に他より高い関連が見られた。

「自分の衣服を洗濯するかどうか」については（図7）「時々する」を入れても男子は20%程度しかなく、女子でも30%ほどである。男女とも中学1年は、その率が他学年よりやや低率である。現代は、全自動洗濯機が普及しており、家族全員のものを一緒に洗濯する家庭が多く、家族の洗濯を任されることが少ないと思われるので、その表れのようなものである。

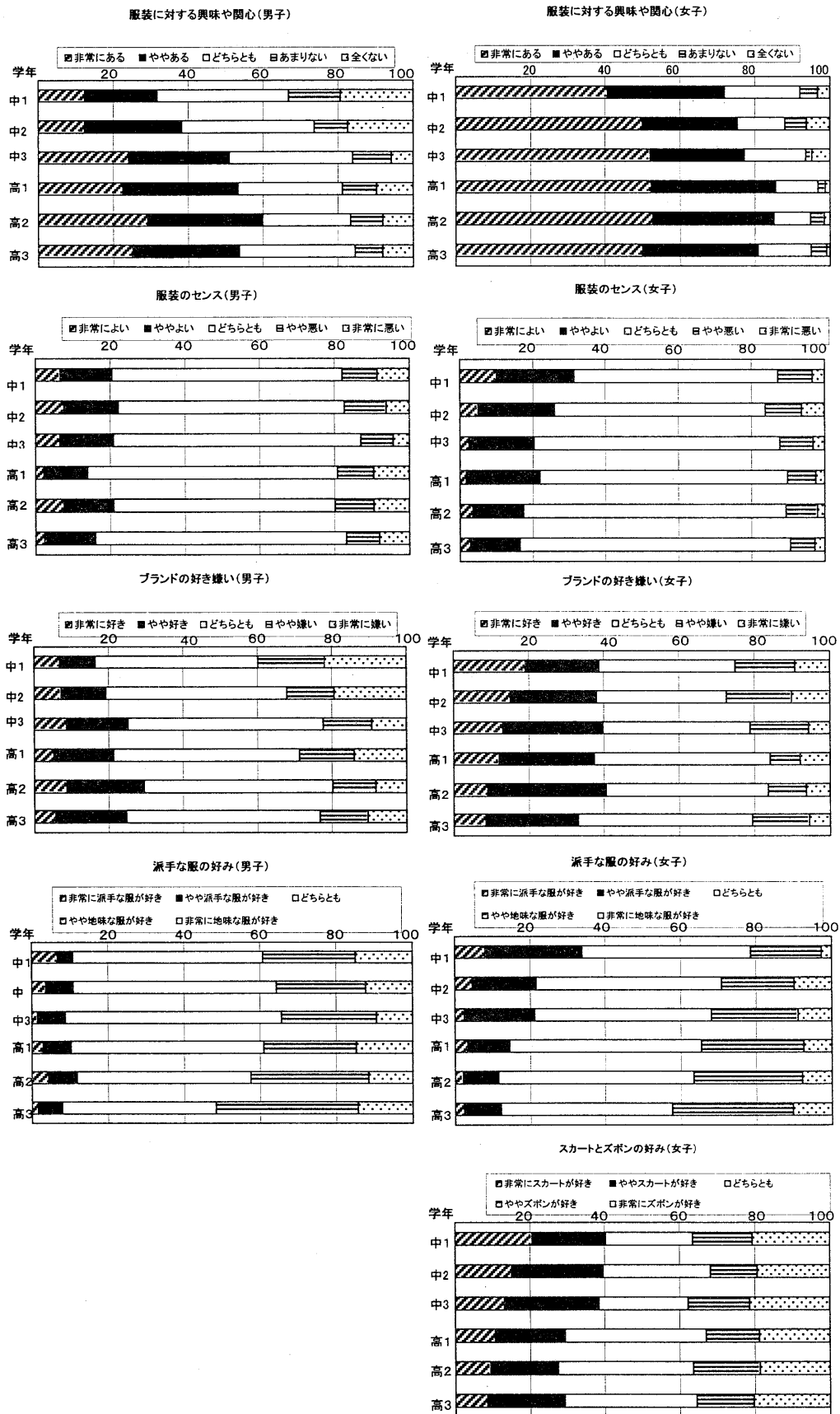


図5 服装に対する興味・関心

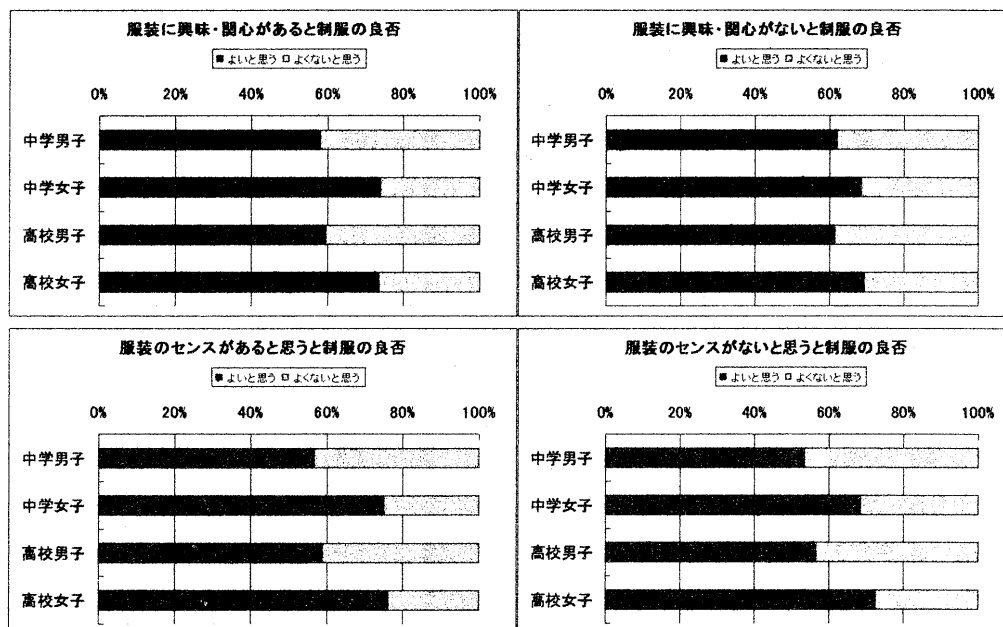


図6 服装の興味や関心・センスと制服の良否

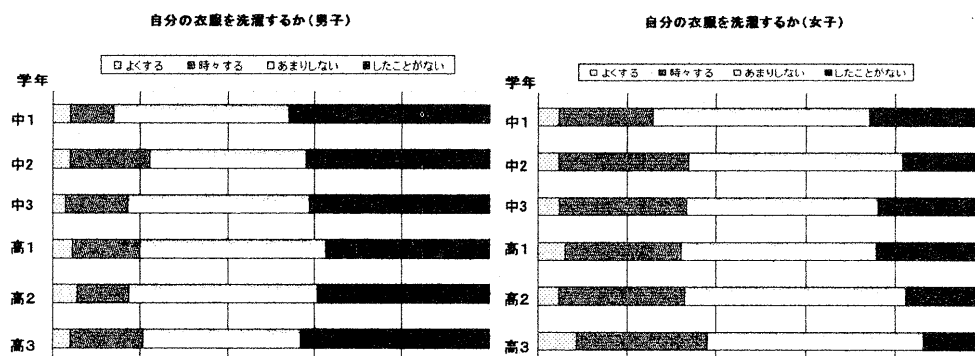


図7 洗濯について

服装への興味関心度が他の生活領域へ及ぼす影響²⁾の結果から、友人関係、校則に対する態度、アルバイト経験などに関連が見られたので、これらが制服があることの良否理由と関係があるのかどうかを見るためにクロス集計を行った。さらに生活規範の中で、電車やバスの中で携帯電話をすることや化粧をすることについてどう思うかについても検討した。結果を図8～図12に示す。

「制服を良い」とする肯定派と「制服は良くない」とする否定派について、肯定派の男子で「いつも友人と会話をする」と回答した者の制

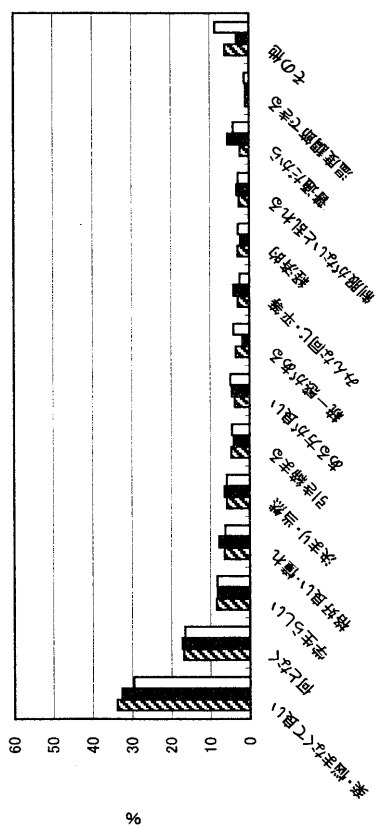
服についての理由が多かった順に並べた。以下、図9～図12についてもその順序で並べた。ここでは、学年別に分けると母数が小さくなったので中学・高校、男女別にまとめて検討した。

友人関係では、「いつも友人と会話をする」「男女ともに友人が多数いる」「同姓のみ友人が多数いる」をまとめて図8に示した。男子は、1位「楽・悩まなくてよい」2位「何となく」3位「学生らしい」となり、「男女ともに友人が多数いる」者も「同姓のみ友人が多数いる」者も「いつも友人と会話をする」と同じ傾向を

制服有り(良)

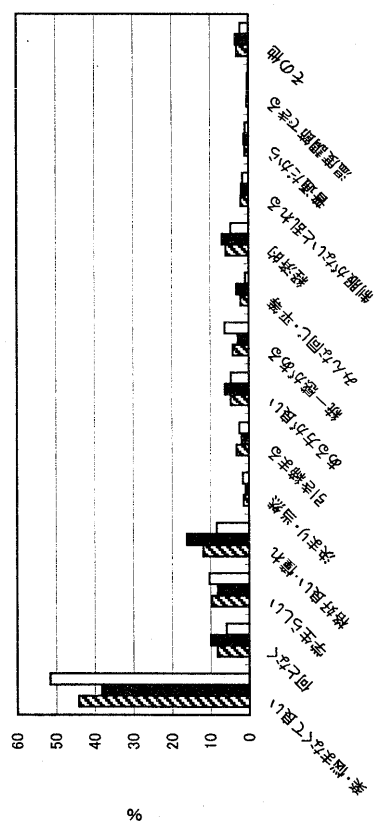
友人関係(男子)

□ 友人と会話する ■ 男女とも友人 □ 同姓のみ友人



友人関係(女子)

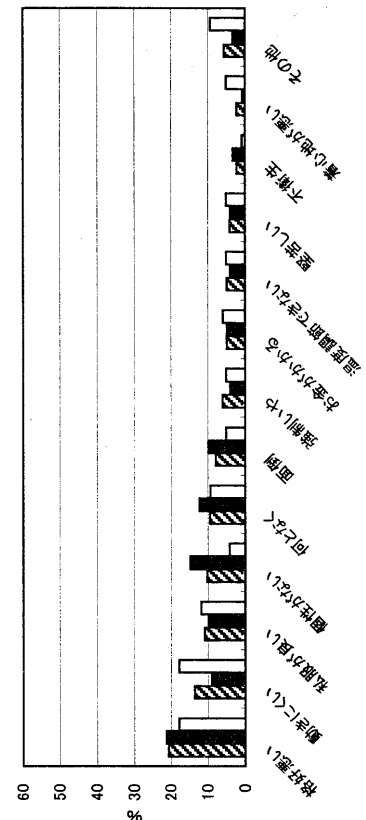
□ 友人と会話する ■ 男女とも友人 □ 同姓のみ友人



制服有り(否)

友人関係(男子)

□ 友人と会話する ■ 男女とも友人 □ 同姓のみ友人



友人関係(女子)

□ 友人と会話する ■ 男女とも友人 □ 同姓のみ友人

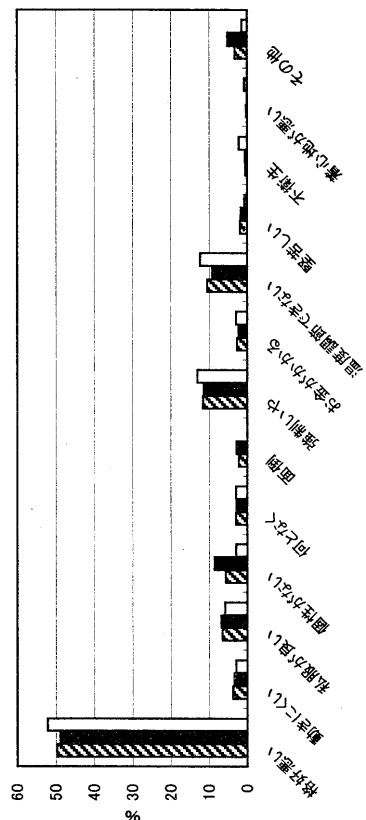
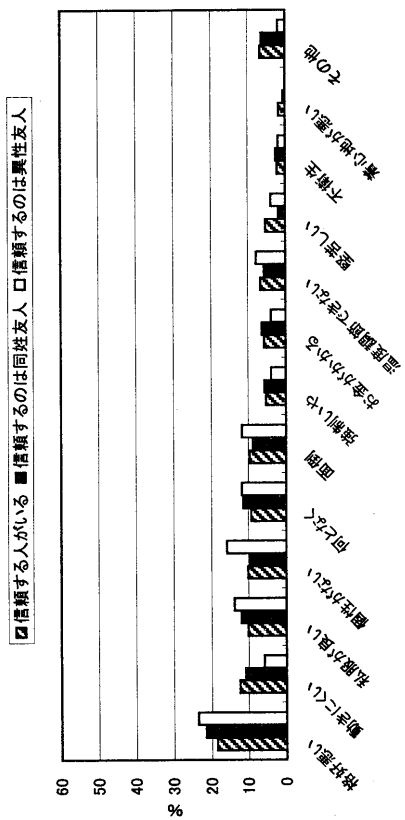


図8 友人関係と制服良否の理由

制服用有(否)

信頼する人(男子)



信賴する人(女子)

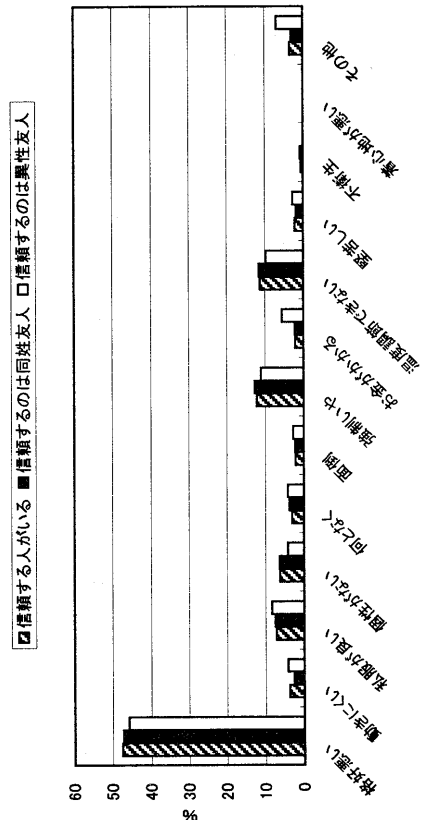
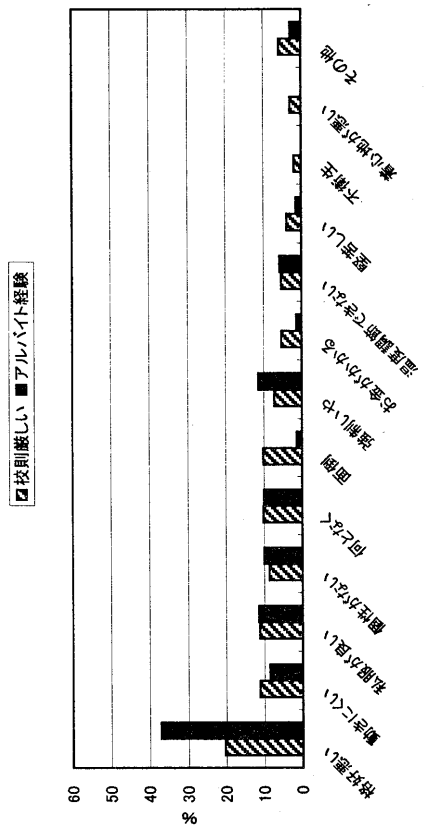


図9 信頼する人と制服良否の理由

制服有り(否)

校則とアルバイト経験(男子)



校則とアルバイト経験(女子)

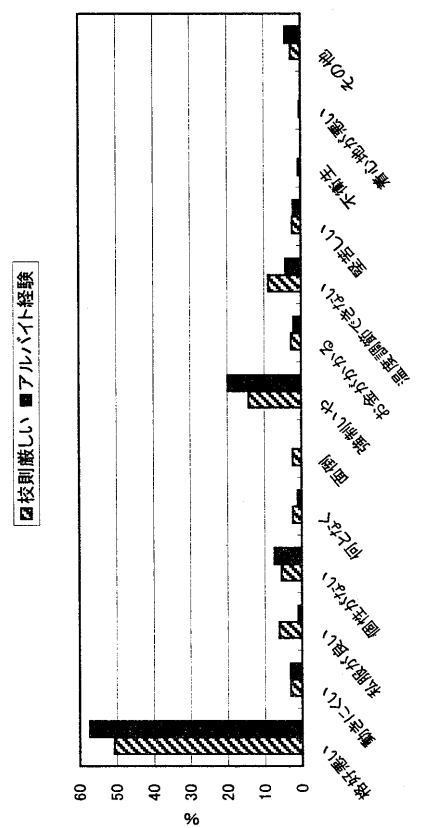
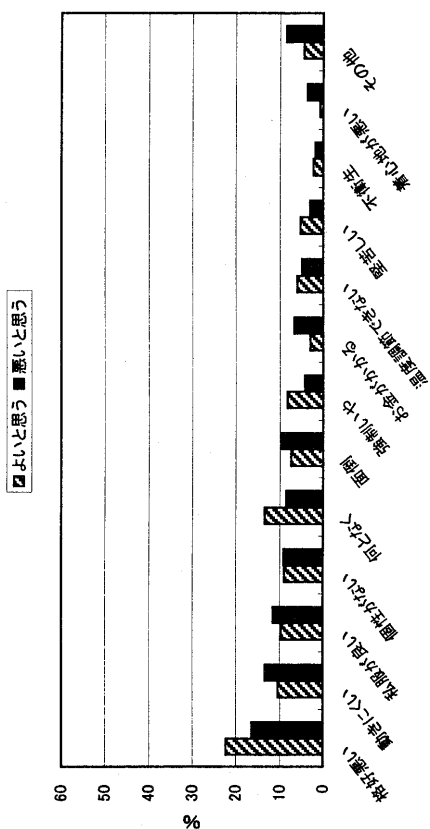


図10 校則・アルバイト経験と制服の良否

制服有り(否)

電車やバスの中での携帯電話(男子)



電車やバスの中での携帯電話(女子)

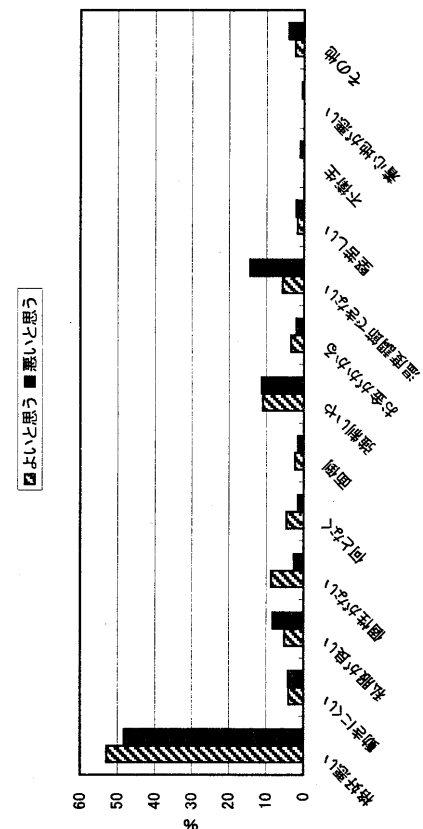
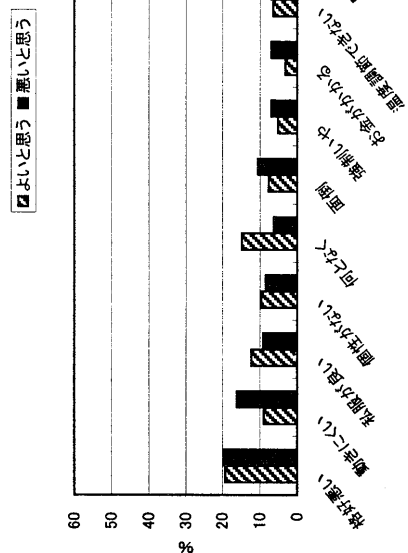


図11 携帯電話と制服良否の理由

制服有以(否)

電車やバスの中での化粧(男子)



電車やバスの中の化粧(女子)

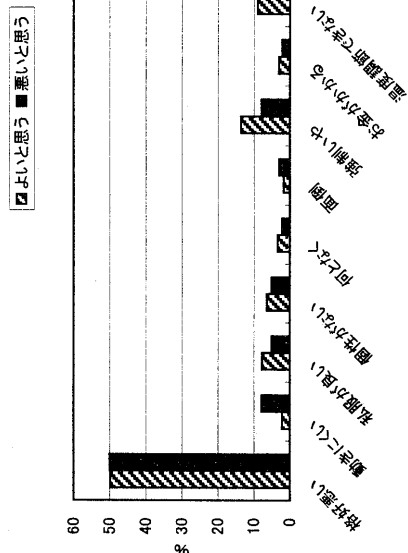


図12 化粧と制服良否の理由

示すが、女子では、1位「楽・悩まなくて良い」2位「格好良い・憧れ」3位「学生らしい」で、男子とは少し傾向が異なった。「楽・悩まなくて良い」は、男子より高率になり、中でも、「同姓のみ友人が多数いる」はその率が高かった。

制服否定派では、「格好悪い」が、男子20%程度で1位であったが、女子は、50%にもなかった。

男子は良くない理由が多岐に渡ったが、女子は「強制いや」「温度調節できない」など男子より良くない理由が明確なのが目立つ。

「信頼する人がいるのかどうか」「信頼するのは同姓の友人」「信頼するのは異性の友人」については(図9)、友人関係とほぼ同じ傾向であった。

校則の厳しさとアルバイトの経験については(図10)、制服肯定派は、男女とも友人関係と同じ傾向であるが、否定派は、男子の「アルバイトの経験がある」は、「格好悪い」とした率が高かった。女子についても、「校則は厳しい」「アルバイトの経験がある」と回答した者は、「格好悪い」率が突出した。「校則は厳しい」としながらも「強制はいや」という理由は、女子では他の理由よりは目立つが、男子は他の理由と大差はなかった。

「電車やバスの中で携帯電話をする」(図11)ことや「電車やバスの中で化粧をする」(図12)ことについては、制服肯定派も否定派もほとんど同じ傾向であった。また、制服肯定派では、「電車やバスの中で携帯電話や化粧をする」ことを「悪いと思わない」も「悪いと思う」も大差のない結果であった。

IV. まとめ

中学、高校生の制服に対する実態を中心に見てきたが、学年差や性差による差は多少あるものの、制服をよいとするものが、6～7割もあり、その理由が、「楽・悩まなくて良い」「何となく」という衣生活にとっては貧しい理由が多かった。

制服を良くないとするものについては、性差

の違いが大きく、さらに中学、高校でも差があり、男性において、中学は「動きにくい」の着用感を理由にするものが1位になったが、高校は「格好悪い」「個性がない」など外見に関する理由が上位を占めた。女子においては「格好悪い」が圧倒的に多かった。高校では、「強制いや」が2位に出現し、規制、規則を少し逸脱した個性ある表現がしたいと思っているようである。

服装に対する興味や関心があるのは、女子の方が高く、男女ともに学年が上がるほど高くなる傾向であった。それに対し、服装のセンスがあるものは男女とも低率で、学年とともに低下している。

生活の規範との関連では、制服を良いとするものは、学年、男女差がほとんどなかったが、制服を良くないとするものは、女子の方に制服をいやとする明確な理由が多かった。校則が厳しいとしながらも「強制いや」とするものは、高校女子を除いて、他の理由との差がほとんどなかった。

ファッションに対して興味や関心は高いが服装のセンスに自信はなく、また、制服の良否に対しても、明確な理由がないのが現状である。今ほど衣生活も多様化してきた中で、制服問題を通していかに衣生活教育をするかは、大きな問題だと思われる。学校は勉学、教育の場であり、その本文をわきまえた上で、自由に個性有る衣生活ができるような衣生活教育をすることこそ今後の課題のように思われる。

V. 参考文献

1) 三重県高等教育機関連絡会議：三重県下における中学・高校生のライフスタイルに関する調査研究 平成14年3月

2) 渡辺澄子ほか：中学生・高校生の衣生活について－服装への興味関心度が他の生活領域へ及ぼす影響－日本家政学会研究発表要旨集 2003年5月